

出雲1000キロウォーク 伊達レポート&古田スケッチ

伊達レポート

ぼろぼろ出雲 なかなか松江

文・写真・伊達美德

ぼろぼろ出雲―道路と川だけの街

2004年5月、出雲あたりを5日間で1000キロメートル歩く旅に、大学時代の仲間と行って来た。私は急用で2日目に帰宅したが、出雲と松江の街歩きをしたので、街並み発見のレポートを書く。

出雲と言えばどこか懐かしい歴史を感じさせるが、実はけっこう広い地域であって、たくさん見所がある。まずは出雲市である。

観光案内書「まっぴるるマガジン松江・出雲・大山・隠岐」昭文社)の出雲市詳細マップに、「高瀬川沿いの古い町並み」と書いてあるので、駅から歩いて見に行った。駅前道路がえらく立派である。「くびき中央大通り」と名づけてある。歩道の修景が、いかにもいかにもの今風デザインだ。沿道には新しい建物ばかりで、補償費で建て直したのだろうか、どうも活気がない。

その道がふいに狭くなるあたりから、中心商店街が始まる。どこか懐かしいアーケード街は、典型的なシャッター通りである。

さて、高瀬川は見つかったが、このあたりとおぼしきところに行っても、それらしい街並みは見当たらない。高瀬川だけは格好よく、これも流行のデザインで修景されているのだが、探している街並みがない。ぼろぼろとした空き地と変哲もない住宅があるばかり。

川沿いのいかにも最近のプレファブ住宅で「ぞい」という家の前に所在無げな老人がいるので訊けば、このあたりであったがみな壊してしまっただ、その広い空き地は都市計画道路用地で、もつと道路が貫通する、と言う。

そうか、このお宅も道路用地補償費で建て直したのだと分かった。都市計画道路が、高瀬川沿いの古い町並みを壊してしまっただった。すぐそこまでやってきてい

るその道路は、これまた立派なつくりである。

出雲市は、道と川ばかりが立派だが、街はどうなっているのだろうか。町を歩く人影は少ないし、商店は空き店舗だらけだ。

見回せば家並みの向こうに「ジャスコ」の看板がある。

おお、そうか、この街も、町はずれの大型店舗にぼろぼろにされてしまったか。もつと街を歩くのがいやになった。そこで、町はずれにある有名な「出雲ドーム」に行ってみれば、おお、あるある、ドームの周りにいくつもの大型店や安売り店舗があって、殺風景な駐車場には自家用車がたくさんとまっている。これでは街の中の商店街に人がいないはずだ。

この出雲ドームはたしか、岩国さんとやらが市長のとき、地域振興プロジェクトとしてつくった評判の施設だったはずだ。田んぼのなかにそんなもの作って街はこうするんだ、と思ったものだが、さらにそれが大型店舗の誘致に働いて中心街を滅ぼしたとなると、振興どころか地域衰退化プロジェクトである。出雲市は道路と川だけしかない、ぼろぼろの街であった。

出雲大社の利益やいかに

さて、出雲といえば出雲大社である。

アプローチは、もちろん大鳥居から神門通りを歩いていく。門前町だからにぎやかだろうと思いきや、シーンとしている。開いている店もえらく少ない。

出雲といいたい大社といいた、街はいついどうなっているのだ。

途中に一畑電鉄の大社駅がある。和風の街並みの中に、スペイン瓦を丸屋根に葺き、ステンドグラスらしき窓があるなど、奇妙なモダンぶりの建物である。

きけば1930年建築というから、なるほど、鉄道は新しい文化を運んでくるものとしてモダンぶりでデザインは受け入れられたのだろう。この下手ながらも、それなりの時代の空気をさせるデザインは面白い。

それに門前町というものは、もともと猥雑になんでも受け入れるのである。その門前町の猥雑ささえも今は失って、静か過ぎるのが気になる。

神門通りの上り坂の街並みを抜けて参道入り口の鳥居



道ばかり立派な出雲駅前「くびき大通り」



人影のない出雲の中心商店街



空き店舗のシャッターに中学生が絵を描いている



訪ねてみれば高瀬川ほとりの古い町並みは消滅



1970年代に撮った小泉八雲記念館(山口文象設計)は、今では下のように建て替えられた(同じ位置から撮影)



松江市城山西通りは城下町に合わない醜い風景、ここから右に首を回せば下のよう松江城が見える



にいたると、ここが最も高い位置になる。振り返ると門前町のパースペクティブの向こうに、大鳥居が立っているのがランドマークとして見える。

ここからは森林の中を下っていく松並木の参道となり、俗界から神域への景観転換の演出が見事である。これは車で乗り付けたのでは体験できない。

自動車時代となつて、大社の参詣客は神門通りも参道も通らずに、社殿近くの駐車場に直行だから、門前町が廃れるわけだ。これではいいのか、大社の街は？ 年に200万人もの参詣客で出雲大社は繁盛しても、大社の街が死んで、出雲大社さんの「利益はどこいった。」

この後に訪ねた松江では、パーク&ライドや一日バス券発行などして、自動車時代に生きるまちづくりを模索し実行しているぞ、大社さんも大社町も町民もなにか工夫しなさいよ。

なかなか松江 がんばっている歴史の街

松江と出雲は、よくあるシンシニシティ、たとえば浜松と静岡、鯖江と武生、高岡と富山、酒田と鶴岡などと同じような関係だろつと思つていたのだが、現実には松江のほうがるかに格が上だった。

松江の駅前に降り立つと、ここは出雲と違って駅前道路は貧弱なのである。それでよろしい。松江でいまさら町並み発見でもないが、気になっている建物がある。小泉八雲記念館である。実は1934年に発足した時の記念館の建物は、ヨーロッパ留学から帰国したばかりの新進気鋭の建築家・山口文象が、この設計をした。

ドイツ・ワイマールにあるゲーテ記念館を模したデザインといわれるが、本当かどうか分からない。その当時としてはモダンデザインであり、街並みとしては周囲とはかなり異なっていたにちがいない。

今の記念館は10年くらい前だったかに建て替えられ

た純粹和風建築で、周囲の街並みを模したデザインとなっている。建て替えられた理由は、古くなって雨漏りがひどくなつたりしたのだが、多分に景観的なこともあつたろつと推測される。

それはそれでひとつの理由だが、1940年代の山口文象の作品がなくなつたのは惜まれる。景観的に違和感があつたかどうか。市民の目ではあるいはあつたかも知れないが、半世紀以上の時間がつくりあげてきた松江の風景となつていたのである。とも思つのである。

観光都市として、城下町特有の道路網と交通ラッシュの矛盾を、パークアンドライド、堀川めぐりの船、20分間隔の観光バス「レイクライン」など、なかなかの技で対応しているのが、公共交通好きのわたしはうれしい。



中心商店街を空洞化させた出雲ドームとその周りの郊外大型店舗



寂しい出雲大社の門前町 門前町の一角にある1930年モダン建築駅舎



レイクラインバスで街を一巡して、ここは面白そうだと見当つけてから、歩きだしたのであった。このバスルートマップに注文がある。ルイスティファニー庭園美術館の位置を、地図では温泉街のすぐそばに描いているのだが、実はえんえんとはるかに遠いのである。おかげで行きたくもないところに時間をとられた。地図はスケールに忠実に描くべきである。それは地図作りの基本なのだ。

街には観光客も修学旅行生もいて、出雲と違つて街は賑わっている。さすがに城下町はよいものだ。しかし、この街も侵されつつある。城山西通りの道沿いが、まあなんといい醜い風景であることか。今、全国の街を蝕んでいる自動車屋と安売り屋のケバケバしい建物と広告看板類の洪水である。松江よ、お前もか。

(040529、071009補綴)